

1. 誰でも「学科試験100点超え」ができる方法

学科試験は、**5科目**の全てで過去問20年を学習すると誰でも**100点**を超えることができる(過去問データは嘘をつかない)。

研究会は、学科試験を短期間の学習で合格するには、限られた時間を5科目平均に活用するのではなく、法規の点数を集中的に上げた方がよいとの結論に至り、「**法規特化型講座**」を推奨している。これは、法規の過去問20年(H7~H26)を分析した結果、融合問題の項目を除くと**93.6%**の法文が繰り返し出題されていることから、過去問だけの学習で法規**28点**が取れるとした。また、効率良く学習するために、どの法文が何%出題されたかなどが分かる項目別の「**出題法文一覧表**」と「**出題問題一覧表**」をまとめた。更に、2ヶ月という最速で合格するため、「**法令集の法文を数秒で引く方法**」などを紹介している。

この提案は、法規が28点なら、他の4科目は比較的低い点数(正解率65%)で合格基準90点を達成するというものである(5科目平均で90点を目指すと正解率72%が必要)。ただし、新試験制度となったH21は97点であり、その後(H22~H29)は、合格基準90点±4点以内となっているので、90点で合格とならない年度もある。ただし、本提案を掲載後、会員から法規は時間が無く、26点程度は取れるが28点は厳しいとの意見があることも追記する。

学科試験125点満点中、**100点**を超えると必ず合格できる。研究会は、様々な検討の結果、**5科目**全てで過去問20年を学習すると、誰でも100点を超えることができると判断している。法規は、上述したように過去問20年で見ると、9割以上の確率で繰り返し同じ法文が出題されている。その他の4科目は、そこまで高い確率ではないが、重要な内容は繰り返し出題される傾向にある。当然、初出題の選択肢問題もあるが、出題形式が4択という特性から**消去法**が有効であり、過去問だけの学習で容易に100点超えができると考えている(ただし、過去問は傾向分析できる20年が必要)。

1級建築士は、建築士としての**幅広い知識**が必要である。従って、試験は偏った問題とならないように5科目があり、その5科目の中で幅広い項目から出題されている。下記に、計画(H8~H27)の分類表を示すが、毎年ほぼ同じ項目から同じような問題数が出題されている。その問題は、大部分が過去に出た問題の言い回しを変えたり、若干詳細になって出題されている(設備、法規、構造、施工も同じ)。**過去問学習が王道**と言われている由縁である。

この過去問を如何に効率よく学習できるようにするかが重要であり、研究会は項目別に全ての選択肢問題を一覧表に取りまとめた(5科目全ての出題問題一覧表)。A3伴1枚には、10年間の問題が見れるようになっている。過去問20年で1項目1問題が出ているものは、A3伴2枚で全ての過去問が見れる。この**見える**という状況が非常に重要である。机の上にA3伴2枚を置くことで、過去問20年の全ての問題が見えていることであり、後述する「**目で見る学習法**」が可能となり、学習効率は数倍に跳ね上がる。一覧表は、類似問題を同じ色分けしているため、同じ色の問題を見比べると、出題パターンや出題傾向なども分かるようになっている。ただし、過去問は会員講座のみでの公開である(公益財団法人建築技術教育普及センターとの過去問使用許諾に基づく)。講座では、更に「**用語解説**」、「**項目別解説**」、「**年度別の問題と解説**」を取りまとめる。これらの資料は、出題問題一覧表で説明しきれない詳細解説を、分かり易い図等による用語解説や項目別解説、年度別の詳細解説で補完することが目的である。

建築業界は、非常に忙しく、1級建築士試験に何年も合格できない最大の理由は、「**時間が無い**」の一言に尽きる。「**もし**」半年間、仕事をしないで1級建築士の勉強だけができるならば、誰でも合格できる(半年間を全て過去問20年の学習ができれば確実に100点超えが可能)。しかし、「**もし**」は無いので、研究会は、如何に短時間に効率よく学べるかを追求することとした。学科試験は、結局「**125問の各項目ごとに1点づつを確実に取る**」ことであり、そこに美味しい秘策などは存在しない(学習法には秘策がある)。各資料は、**PDF化**しているので打出し可能であり、更に**スマホやパソコン**から、何時でも何処でも学習できる。是非、本講座を活用頂き、学科を突破して頂きたい。

表1 I計画の項目別一覧表(平成8年~平成27年)

NO	項目分類	年度																				出題数	出題確率(%)	
		H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26			H27
1	設計手法															1	1	1	1	1	1	1	7	2.5
2	日本建築史作品	25														3	2	3		3	2	2	16	5.7
3	西洋建築史作品															3	2	3	2	3	2	3	12	4.3
4	周辺環境															4	5.16	5		5	4	4.5	10	3.5
5	各部寸法	14.15	14	14	15	15	15	15	15	14.15	14.15	14.15	14.15	14.15	13.14	5.6.7	6.7	4.6.7	4.6.7	4.6.7	5.6.7.8	6.7.8	39	13.8
6	バリアフリー	17	16	16	16	16	16	16	16	17	16	16	16	13	16	8	8	8	8	8	9	9	20	7.1
7	都市計画作品	24			24	24										2	10	9	5	9	3	10	10	3.5
8	都市計画論		24	24			10.24									9.10	9	10	9.10	10.11	10.11	11	16	5.7
9	住宅・集合住宅施設	10	10	9.10	9.10	9		10	9	9.10	10	9.10	10	9	9	11.12	11	12		12	13	13	23	8.2
10	住宅・集合住宅作品	9	9			10	9	9	10							12	11	2.11.12		12	12	17	6.0	
11	事務所・商業施設	12	11	11	11	11	11	12.13	11	11	11	11	11	11	10	13							21	7.4
12	公共施設	11	12	12.13	12	12.13	12.13	11	13.16	13	12	12				14	14.15	14	14.16		15	15	25	8.9
13	病院・高齢者施設		13		13											15		15	15	15	16	16	10	3.5
14	その他作品				25					12						17		16		14		17	8	2.8
15	計画各論総合	8.16	15.17	17	14.17	14.17	14.17	14.17	14	17	13					16	4.17	17	17	16.17	17		28	9.2
16	施工監理															18	18	18	18	18	18	18	7	2.5
17	建築費算															19	19	19	19	19	19	19	7	2.5
18	マネジメント															25	20	20	20	20	20	20	8	2.8
	合計問題数	12	11	10	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	20	20	20	20	20	20	20	282	100

注1) 項目分類は同類問題の名称を示す。H(平成)は出題年度を示す。表内数値(1~20)は問題番号を示す。

出題問題一覧表(A3伴)は会員講座のみの公開

1項目ごとに分けて選択肢を一覧表化(A3伴)

このバリアフリーは20問あり=A3伴2枚

類似問題を色分け

過去問10問あり

2. 他社書籍との相違点

(1) 一般書籍

一般に**市販**されている書籍は、大きく分けると次の3パターンに分類できる。それぞれの概要と課題は以下の通り。

①過去問の解説書

概要: 概ね7年程度の過去問について、年度別に出题された問題を順番に解説している。

課題: 過去問7年では、出題傾向が十分に把握し難い(過去問だけの学習で100点を超えるためには傾向が分かる過去問**20年**は必要)。

②項目別に分類した解説書

概要: 5科目に分けて、各項目ごとのポイントや数パターンの問題例を示して解説をしている。

課題: 一つの項目に対する情報量があまりに少なく、この書籍だけで高得点を取るのは難しい。

③試験関連の建築専門書

概要: 1級建築士試験に関連性を持たせて基本的な事項を解説している建築専門書(分かり易い構造力学等)である。

課題: 基本情報が多すぎて、学習に膨大な時間を要すると共に、その解説が試験問題の何点に繋がるか見えずらい。

(2) 研究会資料

研究会の資料は、以下の特徴がある。全ての資料は、各項目ごとに1点ずつを「如何に効率良く取るか」を目的に作成している。

なお、本HPは、2015年から公開したものであり、資料は作成中のものが多々ある。今後の予定を下表に示す。

①過去問と項目別とを融合させた一覧表 ……過去問は会員講座のみでの公開

概要: 過去問20年を項目別に分類し、全ての問題を一覧表に取りまとめた(1項目がA3件2枚程度でまとまっている)。

課題: A3件1枚が10問題となっているので、比較検討し易いが解説文が少ない(このフォローに用語解説などがある)。

②用語解説

概要: 各項目ごとに分けて、その項目内での重要ポイントとなる用語を図や絵などで詳細に解説する。

課題: 現在未完成、適宜掲載中

③項目別解説

概要: 5科目の各項目別に図などを多く取り入れて分かりやすく、その項目を解説する。

課題: 2018年から掲載開始

④年度別の過去問解説

概要: 新試験制度となったH21以降の過去問をそのまま掲載し、その解答について解説する。

課題: 出題問題一覧表を年度別に取りまとめたものに止まっている。

※「合格」することを第一に

「建築」は奥が深く、様々な知識を学ぼうとすると泥沼に入りかねない。

試験は、問題を解答できなければ意味がない。まずは**合格**すること、自己の学習環境を考慮して最も効率良い学習法を選択し、合格基準点の90点(確実な合格は100点超え)を取ることに専念する。実行委員は、全員が建築業界に30年近く実務をしてきた(全員が1級建築士)。「**建築**」の知識は、30年たっても未だに発展途上であり、人生の全てを掛けても終わらないものである。試験は、過去問を分析して「**正解すること**」に集中したい(建築知識の習得は合格後にじっくりと…)。

※合格率は低い、世の中にはもっと…

1級建築士試験に何年も合格できない最大の理由は、日常業務が忙し過ぎて「**十分な学習時間が取れない**」の一言に尽きる。

しかし、毎年、約2.5万人が受験して約5千人が学科を突破している。その合格率は、15~20%で厳しい試験であるが、それでも約5千人は合格している。

最近、コンピューターで話題となっている「囲碁」のプロ試験は、日本棋院において1年間に3人しか合格できない超難関試験である。小学生で囲碁の神童と言われ、全国大会優勝などした方が、プロを目指して日本棋院の「院生」となる。毎日10時間以上囲碁の勉強をしても、プロ試験(3人)に入れず、断念する方が多々いる。1級建築士も厳しい試験ではあるが、それに比べると毎年約5千人が合格できるので、まだ希望が持てる試験のように感じる。研究会は、如何に短時間に効率よく合格するための知識を吸収できるかを追求し、皆様が5千人の一人に入れるよう日々資料を向上させていく。

3. 100点を超えるためのベストな学習法

ここでは、100点を超えるベストな学習法を紹介する。この**100点**を超える学習法では、5科目の過去問20年を対象とすることから、概ね半年の学習時間が必要である。2ヶ月で学科を突破する方法(法規特化型による90点狙い)は、HOME無料講座の「**法規特化型講座**」を参照下さい。

(1) 講座の概要

過去問20年を学習すると確実に100点超えが可能である。

5科目の**過去問20年**の選択肢問題は、(13年×100問×5選択肢+7年×125問×4選択肢) = **10,000**選択肢問題となる。

これを全て学習するのは、あまりに膨大な量なので「**無理**」と思われるが、ここで学習法の「**秘策**」の出番となる。

単純に、過去20年分の問題と解答を「一般書籍」を購入し、年度ごとに20年分を学習するのは、効率良く理解するという点からは好ましくない。

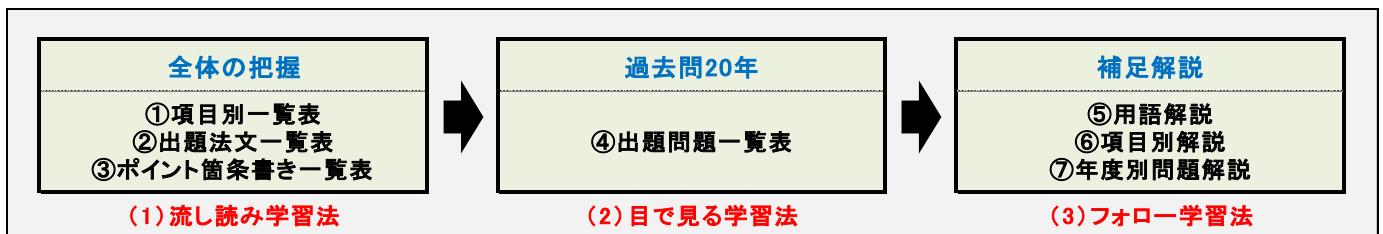
研究会は、項目別でA3件1枚に10問をまとめた「**出題問題一覧表**」による学習法を提案している(これは5科目共通事項)。毎年1問の出題がある項目であれば、過去問20年はA3件2枚に全てまとまっている。これを机に置くことで、過去20年分の1項目の全ての選択肢問題が見れるようになる(1項目2問出題の場合はA3件4枚になる)。この過去問20年の1項目全てが一目で見れる状況にあることが非常に重要である。

この表では、出題確率の高い類似問題を色分けしている。最初は、一通り時間を掛けて全問題を見比べないといけない。その時に、各自が追加でマーカー等して、より分かり易いように書き込みをすると良い。2回目からは、20年全ての問題が一目で見えていることから、類似問題や問題変化パターンなどが目で見分けるようになる。研究会は、これを「**目で見分ける学習法**」と位置付けている。この問題傾向を目で見分ける方法は、単純に過去問を年度ごとに繰り返し解く学習法に比べると、何倍も効率が高まる(これが学習法の秘策)。

この出題問題一覧表は、A3件1枚に10年分の問題があることから、見比べて比較検討するなど非常に使いやすいが、解答スペースの都合上、解説が十分であると言えない。そこで、そのフォローとして、用語解説や音声解説を取り入れた。また、2017年からは新試験制度H21以降の問題について、年度別に詳細解説をする。

講座全体の流れをまとめると、下記の通り、全体の把握(流し読み学習法)、過去問20年(目で見分ける学習法)、補足解説(フォロー学習法)となる。

- ① **項目別一覧表**: 5科目の問題を項目別に振分け一覧表 ……どの項目が毎年何問でているかが把握できる(出題の多い項目から学習する)
- ② **出題法文一覧表**: III法規のみ項目別に選択肢問題の法文を振分け一覧表 ……どの法文が過去問20年で何回出題されたか分かる(出題確率あり)
- ③ **ポイント箇条書き一覧表**: 5科目の項目別にポイントを箇条書きとした一覧表 ……項目の全体像を素早く把握できる(流し読み学習法)
- ④ **出題問題一覧表**: 5科目で項目別に過去問20年の選択肢問題を振分け一覧表 ……毎年1問出る項目ならA3件2枚に過去問20年が全てある
- ⑤ **用語解説**: 5科目で項目別に用語などを図や絵を多く取り入れて解説 ……④出題問題一覧表の解説不足をフォローする位置付け(適宜追加中)
- ⑥ **項目別解説**: 5科目で項目別に図などを多く入れて解説 ……2018年から公開
- ⑦ **年度別問題解説**: 新試験制度H21以降の問題について詳細解説 ……④出題問題一覧表の解説不足をフォローする位置付け



(2) 学習法の一例

研究会の学習法が各種資格学校の対面学習などと大きく異なる点は、あらゆる場所と時間で、自分の得意な項目、不得意な項目を何回でも繰り返し自分のペースで見ることができるといえる点である。

当ホームページは、スマホ&パソコンから見ることができる。例えば、通勤電車内では**スマホ**で、会社内の昼休みは**パソコン**で、特にスマホならトイレ内や打合せ前のちょっとした時間など、何時でも何処でも資料を見ることができる。また、5科目のどの項目でもクリックするだけで見ることができる(資料はPDF化しているのでカラープリント打出しも可能)。建築業界は、設計、施工に関わらず「忙しい」ので、学習時間を**自ら工夫**して作りだすことも合格条件となる。

具体的な学習法として一例を挙げると、例えば「**1日1項目**」を学習すると決める。

5科目の項目は**92項目**ある。1日1項目の学習(1項目が2~3問題あるものは休日に集中学習)とするならば、**約3ヶ月**で1回目の学習が終わる。2回目からは上述した「**目で見分ける学習法**」が使えるので、かなり効率良く短時間に学習することができる。各自の学習時間にもよるが、初めて受験する方でも、概ね半年(1回目3ヶ月+2回目2ヶ月+3回目1ヶ月…過去問20年の学習を3回実施)あれば**100点超え**は可能であるとみている(用語解説、項目別解説、年度別問題解説も同時に学習する)。

※各社PRの中には、近年の試験では新傾向・新技術が合格に影響するとして、「もう過去問では合格は難しい」等と書かれているものもある。確かに、毎年、法改正や新技術が組み込まれるので、影響することは事実である。しかし、その出題比率は、それほど多くない。その証明として、昨年の市販の解説書と今年の解説書を並べて、新しくなっている部分を分析すると簡単に分かる。大部分が同じ内容であり、新規傾向の内容は少ない。逆に過去問の傾向分析や過去問学習無くして合格はあり得ないことが分かる。つまり、新傾向は重要であるが、「過去問では合格は難しい」は、はっきり言って間違いである(更に、新規問題があっても4択なので消去法を使えばかなり解答できる)。

注)研究会は、市販の書籍や各種資格学校の対面学習などを批判するものではない。あくまで短時間に効率良く学習できる方法の一つとして、ご提案しているものである。それにしても、学科も製図もあまりに高額な講座が一般化していることに疑問を感じてはいるが…。